

香川県農業試験場研究報告 第 57 号 (2005 年 3 月) 11-18

裸麦「イチバンボシ」および「マンネンボシ」、小麦「チクゴイズミ」および「さぬきの夢 2000」の種子について、発芽率調査のための適正な休眠打破方法を収穫後の経過期間別に検討した。

1. 発芽率調査のための休眠打破処理が必要な期間は品種によって異なり、「さぬきの夢 2000」は収穫後 1 ヶ月未満、その他の品種は 2 ヶ月未満であった。
2. 過酸化水素水への 24 時間浸漬処理は、「マンネンボシ」、「チクゴイズミ」および「さぬきの夢 2000」では 0.5% 溶液で顕著な休眠打破効果が認められたが、より休眠が深い収穫 2 週間後の「イチバンボシ」では 1% 溶液を用いる必要があった。
3. 収穫後 2 ヶ月以上を経過し休眠が覚醒した種子に対する過酸化水素水処理は、むしろ発芽率を低下させた。
4. 5°C 24 時間の低温湿潤処理は、休眠が深い収穫 2 週間後の「イチバンボシ」に対する打破効果は不十分であることを除けば、安定した打破効果が認められるうえ、休眠覚醒後の種子に処理しても発芽率の低下を招かなかった。
5. 以上より、休眠中の種子の発芽試験を行うための休眠打破方法としては、収穫後 1 ヶ月未満の「イチバンボシ」に対しては 1% 過酸化水素水浸漬処理が、その他の時期と品種については低温湿潤処理が適当であると判断された。

キーワード：裸麦種子、小麦種子、発芽率調査、休眠打破、過酸化水素水、低温湿潤処理